



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.167  
2017.8.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

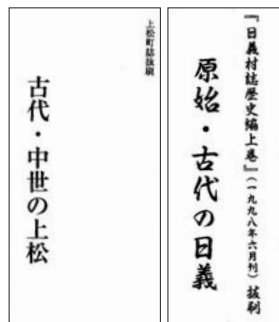
56

## 「木曾の地域誌を調べ・書き・話すイベント」

私は昭和36年に木曾の学校に転勤して以来、木曾教育会郷土館委員になって生駒勘七先生の指導で地域の郷土調査を行い、さらに郡内外・県外に目的地を決めて郷土見学を行った。委員は事前調査・当日用の資料作成・現地説明をしたことで私は考古学以外に興味を持つようになった。そんな私に木曾の本への声がかかり『図説木曾の歴史』『木曾の百年史』『木曾の原風景』『木曾路大紀行』『木曾の昭和史』『権兵衛街道』等の分担執筆をした。また木曾シニア大学の講師では1・2年生に『木曾の古代・中世』を講義する。日義村・木曾福島町・王滝村の文化財保護指導委員で町村内の文化財調査で見聞を広くした。日義村と上松町の町村誌執筆委員になり、日義村誌では「古代」・上松町誌では「古代・中世」を、さらに現代までの補足執筆と、現在(平成25年)王滝村誌の歴史編執筆中であり、近世・近代・現代の項目構成に苦労している。一番為になったのは日義・上松の完了後作成のために集めた文献・文書の目録作成をすることになり悉皆調査をしたことでした。初めてみる資料が多くあり、そのいくつかに私の興味を惹くのをみつけ調べた。日義では木曾義仲・中原兼遠・宮越宿割図・権兵衛街道・宮越大工・人別御改帳・明治4年宮越村戸籍・中央西線の誘致・兵事資料等で、木曾義仲は日義で育ち平家追討の挙兵をした村で『日義木曾義仲公顕彰会』があり会員として全国義仲ゆかりの会に私は参加し、ゆかりの地に案内や『義仲・巴御前連携大会』『信濃三武将』でパネラーになって話す。宿割図ではいくつか課題を見つけて書く。権兵衛街道では書くだけでなく有志と峠越えと伊那との交流をする。宮越大工では宮大工中村伝左衛門の松本平にいくつも残されている社寺を調査し公民館での現地見学の案内説明をする。人別改帳では宿と在郷の地域相をまとめた。明治の戸籍も分析した。鉄道誘致で伊那と木曾の対峙・宮越駅



▲講演



▲町村誌抜刷

開駅百年の文集作成。兵事資料で徴兵・軍事郵便について書いた。上松では小木曾庄地頭真壁氏・浄土真宗和朝先徳連坐像・出土銭・立川流宮大工坂田亀吉等で、真壁氏は古文書が残されていて間違った理解を知り間違いの指摘を書き、公民館活動で話す。先徳連坐像は日本で唯一のもので長野県宝に指定された。町民に像の公開と解説し、像の存在と到来についての推測を書いた。出土銭は木曾にはないと思っていたら町内からの出土を知り、調べたら郡内の出土を文献から知りそれをまとめて紹介する。宮大工坂田亀吉は下伊那に多くの社寺を残し木曾亀と呼ばれていたことを知り、木曾亀の活動を紹介し、公民館の活動として毎年見学社寺を変えて現地へ見学を行い私は説明をした。このように資料室の目録作成でいくつもの課題を見つけ調査する楽しみを覚えた。これからも居住地日義で調べ書きたい。日義公民館生涯学習の歴史サークルの講師では毎月一回の学習会を10年以上続けていて、毎回義仲関係の文献の紹介と時事や義仲以外の村に関する資料・文献を紹介する。これは私にとっても勉強になっている。王滝では教育委員会が御嶽信仰の学習会を進めていて私も参加し勉強した。日本山岳修験学会木曾御嶽学術大会では地元の一人として発表した。木曾郡内の文化財保護委員を会員とする木曾郡文化時連絡協議会は年一回の総会を当番町村での現地見学と講演を持ち会員の研修をしていて、もう30回を越え私は5回講演をしている。NPO法人木曾ユネスコ協会は『木曾丸ごと夢づくり活動』で日本ユネスコ協会の『プロジェクト未来遺産』の一つに選ばれて活動している。私も委員の一人として企画に参加している。夢は中山道木曾路の世界遺産登録であるが毎年具体的な課題を決めており、今は一里塚の石碑・案内板の設置で、石碑の設置が済んだ。『木曾の地域遺産と保全』のシンポジウムを開催し地域への啓蒙と地域遺産の掘り起しがこれからの活動となっている。エコパークの実現は出来なかったが、私は関係しないが木曾中山道中心に日本遺産に指定されて、今この地域での具体的な活動が進められている。

平成28年11月3日 私は文化財保護審議委員として文化の向上に尽力された功績は誠に多大であります。と木曾町から自治功労者として表彰状を授与された。地域での活動が評価されて本当に嬉しかった。

このように地域の中で必要とされる一人とされ活動できていることが私の生きがいとなっている。

\*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

- |   |  |
|---|--|
| ■田舎考古学人回想誌 木曾の地域誌を調べ・書き・話すことで 神村 透 …1         | ■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第160回) 下濱貴子 …3 |
| ■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第19回) 岡田淳子 …2 | ■考古学者の書棚 「日本を知る 鏡の力 鏡の想い」 中村 弘 …4      |

## 考古学の履歴書

## 過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第19回) 岡田 淳子

## ⑨ アラスカ東南部の降雨林地帯

西アラスカの厳しいツンドラ地帯を離れ、アラスカ東南部の森林地帯へ調査地を移した。最初に目をつけたのは、細石器を出すヘクタ島の「チャックレイク貝塚」。この島に到達したスペイン人によって「ヘシータ」と名付けられた島が、英語読みになって「ヘクタ島」と呼ばれている。

貝塚は同年輩の著名な考古学者、ロバート・アッカーマンによって発掘されたが、その後研究は続けられていないようだった。アッカーマン教授とは1964年以来交流があり、夏の調査の際、アンカレッジでも度々顔を合わせていたので、ワシントン州を訪れた折に発掘調査を継続させてほしいとお願いした。結果、快く承知していただけたものである。

新しいプロジェクト「アラスカ東南部の人類学的調査」は、こうして1986年から始められた。調査代表者は岡田宏明、分担者は私と小谷凱宣、矢島國雄両氏である。新しい調査地のパンハンドル地帯は、アンカレッジを経由するよりシアトル経由のほうが便利なので、今迄とは違う都会的な雰囲気の旅程になった。

チャックレイク貝塚はチャック湖(Chuck Lake)の直ぐ近く、同じ標高のところにあり、長野県の矢出川遺跡出土の細石刃、細石核を髣髴とさせる遺物を出す。アラスカではこの時より以前に、アナングラで吉崎昌一氏が自身で提唱した湧別技法による細石刃を発見していた。それより南の地域で、矢出川に類似する細石刃が出土するのは、北太平洋を隔てて両側に同じような文化の流れがあるのかもしれないと、私は実情を確かめる意味を感じていた。それが貝塚であればなおさらである。

チャックレイク貝塚は地点貝塚で、径1~1.5mの浅鉢を伏せたような形の貝層がいくつも散在する。貝の種類は、クロマキビやエゾチジミボラなどの巻貝とウチムラサキやアサリの仲間の二枚貝で、みな白く崩れかけていた。貝に混ざっていた魚骨はマダラがほとんどで、サケ類やカレイなども見られ、今は離れている海とのつながりが知られた。

石器は0.5~1cm幅の細石刃で、長辺が欠けたものばかりである。残された石核は縦横ともに2~3cmと小さく、楕円のプラットフォームをもつ円柱形から円錐形の形状だった。別に幾つかの削器や搔器も発見され、鹿の肢骨を素材とする篋状の骨器や、二枚貝を加工したナイフ状のものも見つかっている。

チャックレイク貝塚を2シーズン発掘したが、小貝塚以外、遺構は発見されなかった。矢出川遺跡でもそうだったので、キャンプ地だったのかと思う。チャックレイク貝塚は後にC14計測の結果として、7200年~8000年前の年代が与えられた。日本の細石刃年代よりはかなり新しい。

これに続く傾斜地にも貝の散らばりが見られたので、斜面にトレンチを入れてみた。二枚の貝層を持つ斜面貝塚で、握り槌や敲き石、刻みを持つ魚槍、釣り針などの骨角器が発見されたが、細石器は発見されず、年代も5500BPを遡らないものであった。

遺跡は国有林の中にあり、樹齢100年以上の大きな樹木が根を張っているところなので、発掘調査は容易ではなかった。それなりの手続きをとった上での作業だったため、大形のテントとレンジャーの休憩小屋は、国有林事務局のご厚意で提供されたが、現地で借り上げたトラックは、車のキーの差込口が



▲チャックレイク遺跡の景観(上空より) 中央がChuck Lake 1989年

壊れていた。「けものみち」を少しだけ広げたような狭い道は、雌鹿と仔鹿の親子や、植物を好むクマが行き来していて、人以外の生き物の土地であることを実感させられた。

この島にはシカの生息数が多く、土地の人は「シトカ・ブラック・テイル」と呼んで、世界一美味しいと自慢している。骨角器はこの種のシカの骨製であろうか、古くからシカの棲んでいたことが知られた。調査中、実際に「あなたたちの分・」と言って持ってきてくれた丸ごと一頭のシカは、何日も料理して食べたが、とても食べ切れるものではなかった。それでも、島に住むたった三家族の樵(きこり)たちとも仲良くなり、別れ際には、再会を楽しみにしていると云われ、一週間ごとに見回りに来る国有林の役人からは「日本人が来たら、以前より森の中が綺麗になった」という感想を貰っている。

チャックレイクには、ベニサケが溯ってくる。この地域で「サツカイ」と呼ばれる紅鮭は、上流に湖がある川だけを溯るそうである。私たちは、この湖からチャック・クリークを流れ下った河口にある「ウオームチャック」の廃村や、船着場の「ポート・アリス」にある岩陰も調査してみることにした。

ポート・アリス岩陰遺跡は、チャックレイク貝塚と时期的にあまり変わらないものかと期待を寄せたが、細石刃は発見されず、貝もブルー・マッスル(ムール貝)が主で、年代は後に4000BP前後と分かった。

その年、調査に参加してくれた標津町ポー川遺跡公園の梶田光明氏と明治大学考古学専攻生の生田浩之氏が、天井が低くて狭い岩陰の中で、何日も発掘に奮闘してくれた。遺物は国外持ち出しが叶わないので、急いで整理や記録を続ける。

ウオーム・チャックは、文字通り温かい水が海底から湧き出ている入り江で、水温は17℃前後を示している。かつてこの廃村に住んでいたと言うトリングト族の女性が訪れて、この付近の情報を教えてくれた。

略歴	
1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウイスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010~2017年	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。



## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 160

## 八日市地方遺跡 ～石川県小松市～

下濱 貴子

私が八日市地方遺跡の名前を知ったのは、大学3年生の頃。弥生時代を研究対象としていたのに、当時の富山では、弥生時代の低湿地遺跡を掘る機会には恵まれなかった。先輩を頼って大阪に行き、淀川水系の低湿地遺跡、若江北・巨摩廃寺遺跡発掘調査を経験した。多くの低湿地遺跡がある近畿ではなく、北陸の弥生時代遺跡で方形周溝墓を掘れる機会があればと考えていた。そんな時、小松市で八日市地方遺跡の発掘調査のため、職員募集があるとの話を先生から伺い、好機だと考え、縁も所縁もない小松市の発掘調査員の就職試験を受けるに至った。

八日市地方遺跡は、小松駅東に展開する標高1.2mの砂帯に立地する。昭和5年の遺跡発見から、昭和25年には明治大学、石川考古学研究会合同の調査が行われており、北陸における櫛目文土器の標識名「小松式土器」の由来をもつ、古くから知られた遺跡である。現在では、埋積浅谷の両岸に、居住域、墓域、環濠が複数展開する15haを超える北陸随一の拠点集落であることが判明している。

平成5年から開始した小松駅区画整理事業では、約3万㎡以上もの発掘調査が計画されていた。

遺跡に携わったのは、就職して2年目。高所に立地する弥生時代終末期・八里向山遺跡の調査を終えてから、八日市地方遺跡の一担当につく。ただ方形周溝墓が検出されている調査区はあるものの、私が担当した調査区2/3は、埋積浅谷が広がる調査区。傍目に墓域調査をうらやましくも、谷の調査から、なにか成果をだせればと必死で調査した。湧水との戦いの中、膨大に出土する土器・木器・石器。いつのまにやら、幾重の層を面的に調査するごとに、土器の表情の違いに気づくようになる。下宿先も遺跡の中、歩いて5分以内であったため、休日も極力、土器の検出状況の図面を取りに現場に行った。

いま思えば20年以上も前になる。がむしゃらにほとんど知識のないまま、この化け物のような遺跡の情報をなんとか残したいと考えていた。

平成10年の発掘調査をピークに、平成12年には小松駅土地区画整理事業に伴う発掘調査を終えた。整理作業着手は、調査の継続とともに属性ごとに担当が決められ、平成14年には事業費における報告書刊行予定が決まる。当初、木製品をもっとも多く取り上げ、無数の情報と可能性をもつ木製品を担当したいとも思ったが、協議の結果、土器を選んだ。遺構論を展開するために



▲把付磨製石剣出土状況

は、土器を極めるのが必須だから。

小松駅土地区画整理事業の調査で発見された土器は、コンテナ約4,000箱。市の単独事業で真向に整理できる量ではない。学生時代にまともに土器の分類、実測を学んでいない中で、私が選んだ整理手法は以下のとおりである。

まず、密集する土坑群では、前後する時期を層位的に見極めるのが困難であった。それに比べ、自らが携わった埋積浅谷は、弥生時代前期中段階から弥生後期前半まで、泥炭層を主体としながら、砂層を層離面として分けることができた。そして、特殊品の多くは、埋積浅谷からの出土であったため、時期評価も求められた。そこで、埋積浅谷の肩部にあたる貯木部分の土器を重点的に整理した。既往の編年には目をつぶり、ひたすら層位的に把握した八日市地方遺跡の土器と向き合うことで、土器の形式変遷を組み上げた。その上で、系統の違いを施文工具、調整方法から読み取り、実測図には、系統の違う混在した様相をいかに表現するかということに気を配った。この報告書は私にとって、現在の研究の骨子になったと考えている。

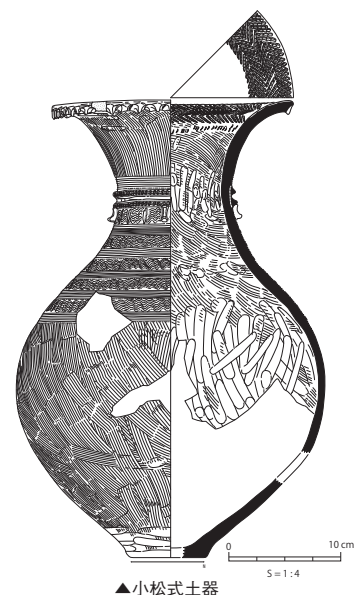
さらに報告書刊行後10年以上かけて、遺構編の出土品整理を携わる機会に恵まれた。その間には、結婚・出産・子育てを通過しながら、多くの道のりの中でも、ずっと細く長く八日市地方遺跡に携わってきた。

そして、平成23年度には全国初弥生集落一括資料として1020点の重要文化財指定に至る。発掘調査や出土品整理から得られた成果は、平成22年に開館した小松市埋蔵文化財センターにおける古代体験学習のメニュー創設や歴史授業支援、シンポジウムへとつながる。

小松市では、資料の公開・活用を広く行ってきたことから、研究者のネットワークも拡がり、八日市地方遺跡の分析は様々な研究分野へと深化することができた。研究、業務、市の施策すべて、私の根幹に八日市地方遺跡は存在する。

大規模な調査を終えた後も、この遺跡を通じた人々との出会いが、現在の私の支えになっている。私はこの遺跡からたくさんのことを学んできた。

八日市地方遺跡は、私にとってかけがえのない遺跡。退職までも、いや、一生この遺跡になんらかの形で携わることができたら幸福だろう。



▲小松式土器

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは田邊朋宏さんです。

## 考古学者の書棚

## 「日本を知る 鏡の力 鏡の想い」

中村潤子／大巧社(1999)

中村 弘

平成26年、兵庫県立考古博物館は316面の古代中国鏡を中心としたコレクションの寄贈、寄託を受け、平成29年4月にはその展示施設「古代鏡展示館」を考古博物館の加西分館として兵庫県加西市に開設した。寄贈を受けた作品群は寄贈者の名前をとって千石コレクションと呼んでおり、年代は伝説の王朝とされる「夏」から「宋」までの約2,700年間と長期間にわたり、宝飾鏡30面以上、海獸葡萄鏡35面などを含む点に特徴をもつ。

幸いにも私は開館の準備段階から建築、展示工事を担当するチームの末席に連ねさせて頂き、これまでほとんど接することがなかった中国鏡に触れ、勉強する機会を得た。さらに、開館に先立って設置された調査研究委員会の7名の先生方と共にコレクションを1点ずつ観察し、考証、着眼点、資料との向き合い方など多くを学ばせていただいた。

こうして開館した当館は兵庫県立フラワーセンターの中に整備され、当館の入館料が100円(入園料は別途500円)と低く設定されているため、お花見ついでに立ち寄られる来館者が大半である。このような来館者は古代にも中国にも大きな関心を寄せているわけではなく、鏡に対しても特別な思い入れはない。お花を見るためにフラワーセンターに入園すると、100円で何か古代のきれいなものが鑑賞できるのでたまに立ち寄ったのである。こうした「立ち寄り来館者」層にどの様に対応すれば古代鏡、古代文化に興味を持って頂くことができるのか、それが当面の課題として突き付けられることになった。

「立ち寄り来館者」には時間をかけて説明している暇はない。短時間でハートをキャッチし、「すご〜い」「へ〜」「なるほど」が必要である。難しい語句、漢字、言い回しはたちまち拒絶され、意識の外へ追いやられ、おもしろく奥深い古代鏡の世界にたどり着く前に一蹴されてしまう。

素人同然から始まった私は、鏡の部分名称、漢字が並んだ長い鏡式名、図像の名称と個別解釈、型式分類、変遷と年代観など、頭へ詰め込むべき基礎データが多く、新しいことを学ぶ新鮮な楽しさと同時に苦しさも伴っていた。難解な用語と基礎知識という苦しさは「立ち寄り来館者」にとっても同じで、一所懸命に説明したところで苦しみを移植するだけである。それより先にある「それがどうした？」に答えるためには、もっと大きな鏡文化に触れる楽しさが必要で、そこを導入としてギャラリートークを展開する必要があった。

緊急を要した暗中模索の中、中村潤子氏の『鏡の力 鏡の想い』と出会うことができた。平易な文章を使いながらも、しっかりとした基礎資料に基づいてあり、鏡を歴史学の補助資料として扱うのではなく、鏡そのものを正面から捉え、脈々と流れる鏡の文化と向き合う姿勢が買われている。それは、新たな来館者層を取り込むには強力な武器となる。

目次は以下のとおり。

序章 鏡にうつす

第1章 鏡の発見

第3章 古代日本の鏡文化

第5章 鏡の力

第7章 鏡と信仰

第9章 鏡と女

第11章 ガラス鏡への道

第2章 鏡の裏の世界

第4章 三角縁神獸鏡の謎

第6章 記・紀、万葉の鏡

第8章 火と水の鏡

第10章 鏡文化の展開

終章 鏡がうつす日本文化

あとがき

この中で氏は、鏡に何を見るかは「人が人であることを裏付ける文化的背景が反映されるもの」であり、「多くの人々に共通する普遍的なもの」であるとともに、それ以上に「地域・宗教・風習・男女の違いなどによってさまざまに変化し、また時代によって変容するもの」と捉え、「鏡の扱い方、鏡への想いを探ることによって、それぞれの文化的特徴を照らし出させることができる」とされている。

こうした考えに基づき日本文化とそれに影響を与えた中国文化を中心に取り上げられているが、内容は約6,000～7,000年前のトルコから昭和の日本にまで及び、資料は考古資料のほか、中国の古文献や『記・紀』、『万葉集』、日記類までも扱い、伝説、伝承、習俗をからめて多方面から鏡文化を考察されている。その結果、時代や地域を越えた普遍的なものを鏡から見出すことに成功している。

この本の中で知り得た鏡と向き合う「人として普遍的な楽しさ」は来館者を前にした時、大きな力となった。そして、その楽しさを来館者と共感することができた。

来館者と学芸員が同じステージに立つとき、初めて対等な対話が生まれる。そして言葉を交わし合い、互いに納得するとき、展示品は来館者にとって現代的意義をもつことになる。大切なのはどの様なステージを設定するかである。

鏡は今も私達の生活に息づいている、というより鏡を見ない日はない。そして現代の世にも鏡のもつ実用性と呪術性の二面性は息づいている。本書から、鏡を通じて時空を超えた心の会話ができる可能性を感じることができた。その楽しさを来館者と共に感じたい。



▲月宮双鶴銜綬龍溝紋八花鏡

## アルカ通信 No.167

発行日 2017年8月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp